



イラク・クルディスタンを訪ねて

吉岡 明子
よしおか あきこ

一般財団法人日本エネルギー経済研究所
中東研究センター 研究員

初の訪問

イラク北部のクルディスタン地域では、至るところにクルドの民族旗がはためいていた。公用語はアラビア語とクルド語だが、目に入るのも耳にするのも、圧倒的にクルド語が優勢だ。誰と話しをしても、「我々」といえば、それは「我々イラク人」ではなく「我々クルド人」のことだった。「政府」といえば、それはバグダードのイラク政府ではなく、クルディスタンの主都エルビルに拠点を構える「クルディスタン地域政府」を指している。イラクの政治・経済情勢を調査するため、イラクを訪れたつもりでエルビルの町に降り立ったわたしは、ここはもはやイラクというより、クルディスタンなのだとすることを思い知らされた。二〇一二年五月、わたしにとって初のイラク訪問であり、初のクルディスタン訪問だった。

地域政府の紋章には「1992」の文字が刻まれている。一九九二年の湾岸戦争後、旧フセイン政

内の治安の良さだ。イラクでは残念ながら今もテロ事件は珍しくない。だが、クルディスタン地域に限れば、ここ五年ほど大規模な事件は起こっておらず、町の様子も極めて平穏だ。地域政府はその景観と気候、さらには安全を強調して、イラク国内外からの観光客の誘致に余念が無い。

とはいえ、エルビルの町はクルディスタン地域の南の境界から二〇〇キロメートルと離れていない。テロリストの流入に対する警戒は厳重だ。町のなかのあちこちにカラシニコフ銃を構えた、シムメルガ(クルド兵)の姿があるし、いったん市街地を抜ければ、幹線道路には必ず検問所が設置されて



シタデル(城塞)から町を臨む



買い物客で賑わうショッピングモール。
2010年12月にオープンした



伝統的なカイセリ・バザール

権が北部の支配を諦めて軍を撤退させて以降、ここは事実上、クルド人の自治区となり、翌九二年には選挙を経て自治政府が形成された。九〇年代は経済封鎖や内戦に見舞われ決して順風満帆ではなかったが、事実上の国造りの試みが進められてきたことは間違いない。九〇年代半ばに教科書がアラビア語からクルド語に切り替えられたときから、域内の学校では「クルディスタンの歴史」が教えられるようになったという。ここでは、「戦後」が始まったのは旧フセイン政権が崩壊した二〇〇三年ではなく、自治が始まった一九九二年なのだ。そして二〇〇三年のイラク戦争後、自治区の地位は憲法で保障された。

めざましい開発ラッシュ

その自治のスタートから二〇年、イラク戦争から一〇年を迎える今、クルディスタン地域は開発ラッシュの最中にある。町中そっちにもこっちにも建設

いる。駐在員や出張者のために二四時間体制で警備会社と契約している外国企業も多い。

かくして、わたしのような外国人が一人で町をぶらぶらと歩いている、あるいは武装したボディガードを傍らに連れていても、どちらの光景も珍しくないという何とも不思議な場所になっている。

自治の将来

そんな経済発展と治安の良さを誇るクルディスタンだが、課題も山積している。最大の問題はイラク政府との関係だろう。石油産業が域内最大の産業になっている一方で、イラク政府は、地域

工事現場が見えている。二月に再訪した際には、工事現場の数がさらに増えていることに驚かされた。ついでに、駐車スペースを探して右往左往する車の数も増えた気がする。二〇一〇年にオープンしたエルビル新空港には各国から直行便が多数乗り入れ、イラクの玄関口のひとつになっている。外国人ビジネス客が泊まるような四つ星や五つ星のホテルの選択も、少ないながらも増えてきた。携帯電話の普及もめざましい。昔ながらの伝統的なバザールが軒を連ねる一方で、整地された区画にはドバイと見紛うような高層ビルの完成予想図が掲げられていた。地域政府は石油や天然ガスの開発にも注力している。天然ガスは発電用燃料になり、イラク全土の電力不足は未だ深刻ながら、ここでは季節によって二四時間の電力供給が実現している。

平穏と緊張が混在する町

この開発ラッシュを支える要因のひとつが、域政府が独自に外国企業と契約を結んで開発をおこなっていることに強く反対している。どこまでがクルディスタン地域かという境界も未決着だ。境界線上でイラク軍とシムメルガがにらみ合っただけで即発、という事態も再々起こっている。

この先の将来、クルディスタンが本当の独立を目指すのかどうかはわからない。だが少なくとも、長い時間をかけて手に入れたこの自治を、彼らはそう簡単には手放さないだろうということだけはひしひしと伝わってくる。ということは、イラクはこの地域とどう折り合っていくのか、この先も頭の痛い課題を抱え続けることになるのだろう。